

専門職研修におけるカルタ教材作成ワークショップ
の試み：
がんカルタを活用して発達障害カルタを作成する

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2021-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 朋子, 武久, 千夏 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4507

専門職研修におけるカルタ教材作成ワークショップの試み —がんカルタを活用して発達障害カルタを作成する—

健康栄養学部 健康栄養学科 鈴木 朋子
社会医療法人弘道会なにわ生野病院心療内科 武久 千夏

要旨：専門職研修では、学習経験やキャリアが異なる参加者が混在していることが多く、個々の参加者の学習レベルに応じた学習内容を提供することは難しい。近年、教育機関では、受動的な学習からアクティブラーニングへの転換が求められ、保健医療従事者の育成分野においても、講義型の教育・研修から、ワークショップ型への移行がみられる。著者らは、これらの視点から、参加者の主体性に焦点を置くワークショッププログラムを考案した。本報では、実践報告として、活動内容および評価、今後の課題を検討することを目的とする。プログラムの構成は、1) 「がんカルタ」を活用した教材の体験と解説、2) 神経発達症群／神経発達障害群（発達障害）に関するグループワークおよびカルタ作成ワーク、3) 講評とまとめであった。臨床心理士や養護教諭ら 32 名が参加し、個々の参加者の主体的な学びが観察された。今後、普及のための方策の検討や客観的な評価を行っていくことが課題である。

キーワード：カルタ、ワークショップ、専門職研修、アクティブラーニング、神経発達症

緒言

保健医療従事者をはじめとする専門職は、生涯にわたり、自己学習や種々の研修の受講を通して、自己研鑽を積むことが求められている。一方で、専門職を対象とした研修では、学習経験やキャリアが異なる参加者がみられることから、全ての参加者の学習レベルに応じた学習内容を提供することの困難さがある。

近年、大学をはじめ教育機関においては、受動的な学習から、アクティブラーニングへの転換が求められている。アクティブラーニングは、「能動的学習」「積極的学習」「主体的学習」と訳されることが多い¹⁾。溝上 (2014) は、アクティブラーニングについて『一方的な知識伝達型授業を「聴く」という学習を乗り越えて、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う学習のこと』と定義している²⁾。すなわち、アクティブラーニングでは、学習活動を通して、より深いレベルの学びや本質的な学びへと、発展することが求められている。

アクティブラーニング型の授業の質を高める工夫として、反転授業がある³⁾。反転授業は、反転学習とも呼ばれ、一般的に、事前学習として、マルチメディア教材等を活用した自習（授業外学習）を行い、授業ではその知識を活用したアクティブラーニングを行う。例えば、事前学習として、各自で、講義ビデオの視聴

やテキストの熟読等の知識学習を行う。そして授業では、事前学習の内容を活用し、ディスカッション等を通して、論理的な思考を深めたり、課題の解決に繋げることをねらいとする。

保健医療従事者の育成分野においても、同様の転換が観察される。教育・研修の方法は、聴くことを中心とした講義型の教授法から、参加者が自ら参加・体験し、共同で学びあい、作り出すことを中心としたワークショップ型へと移行している⁴⁾。また、ワークショップの考え方を、多くの場を取り入れるためのマニュアルも整備されている⁴⁾。

ワークショップで用いられる学習の方法には、スモールグループ討議、KJ法（文殊カード法）等があり、グループダイナミクスを醸成することが必要とされている⁴⁾。さらに、ワークショップは、カリキュラムとして、目標を明確にし、方略を練り、評価、改革を視野に入れて編成すべきものとされている⁴⁾。これらの点から、ワークショップは、綿密に計画された学習プログラムであることがわかる。また、ワークショップに、先述の反転授業を応用することで、知識伝達型の講義部分の時間を短縮することも可能となる。

著者らは、これらの考え方に基づいて、反転授業の考え方を取り入れたワークショッププログラムを企画し、実施した。本報では、実践報告として活動内容と

活動評価を報告するとともに、今後の課題について検討することを目的とする。

本報において著者らは、カルタ教材の作成を最終活動としたグループワークを採り入れたワークショッププログラムを考案した。カルタ教材は、短い文言とそれを連想させるイラストで構成されることが特徴である。先行研究では、語彙や概念の獲得や定着など、様々な教育場面で活用されている⁵⁻⁷⁾。著者らは、カルタ教材を作成するために、グループで意見を出し合い、調整し、作り上げていく活動は、アクティブラーニングで必要とされる「書く・話す・発表する」という活動を含み、そして、それらの活動を通して、知識の習得というレベルをこえ、より深いレベルの学びへと発展させることができるものと考えた。

なお、背景として、本研修を主催した医療機関（心療内科）では、セミスター制で、臨床心理士や養護教諭、管理栄養士など、多職種の専門職およびそれらの養成課程で学ぶ大学院生を受け入れる臨床研修プログラムを経年的に実施していた。また、特別プログラムとして、1日セミナーなどのプログラムも提供されていた。本報で報告する研修は、特別プログラムとして計画された1日セミナーで、「神経発達症群／神経発達障害群（発達障害）について理解を深める¹⁾」をテーマに計画されたものであった。本報はその一部についての報告である。

活動内容

本プログラムの主な参加者は、既述の研修プログラムの当該年度の受講者、もしくは過年度の修了者らであった。特別プログラムとして計画された1日セミナーの募集に対して、受講を希望し、参加した者であった。プログラムの参加者は、臨床心理士、養護教諭などの専門職および養成課程の大学院生を含め32名であった。本報告には、個人的な情報は含まれないが、研修の様子や成果を学術的に報告することについて了承を得ている。

研修の全体像は、反転授業の考え方にに基づき、各自で事前学習課題に取り組んだ上で参加することを条件とした。当日のプログラムは、午前の部（135分）、午後の部（165分）の二部構成で、本報で報告する「カルタ教材作成ワークショップ」は、午前の部であった。

本プログラムは、発達障害について理解を深めると

ともに、午後の部の「事例検討会」の前に、テーマについて、参加者間で共通理解をもつことも目的としていた。

プログラムの構成は、1) カルタ教材への理解を深めることを目的とした教材体験と解説（40分）、2) 発達障害に関する共通理解を共有するための「発達障害カルタ」作成ワーク（90分）、3) 講評とまとめ（5分）であった。

1. 事前学習

事前学習課題として、専門知識の確認や向上を目的に、1) 発達障害に関する書籍や資料を自分自身で収集し、熟読することを課した。また、専門知識を臨床や教育などの実践の場で活用するという視点から、2) 発達障害というテーマについて、自身のこれまでの活動を振り返ることも課題として提示した。

2. 当日プログラム

1) カルタ教材への理解を深めるための体験と解説

著者らは、グループ学習で活用する健康教育教材として、「がんカルタ」を開発した経験があった⁹⁾。本教材は、がん対策に関する適切な知識と、自分自身が今できることを考えるためのメッセージを提供することを目的とするものであった。開発は、専門的な立場から、がん疫学を専門とする研究者と健康教育を専門とする研究者が、また、一般市民に理解しやすい教材を実現することを目的に、栄養学を学ぶ女子大学生が共同で行った。

一般的なカルタでは、とり札は、文言の最初の一字とイラストで構成される。一方、本カルタは、最初の一字だけでなく、文言をすべて示すとともに、裏面に、札に関する内容の解説を示し、ゲーム的な要素よりも、教育的な要素に重きを置くものであった⁹⁾。

ワークショップでは、6つの小グループに分かれ、カルタとりを体験した。その後、カルタの構成やカルタ教材のねらい（表1）、カルタ札の位置づけや、カルタ札を通してメッセージとして伝えようとするということについて解説を行った（表2）。

これらの活動は、カルタ教材を活用することで、「がん対策」の初学者であっても、全体像や領域別のポイント、自分自身ができることについて理解が促されるという特徴を、参加者が体感することを目標としていた。

1 「DSM-5[®] 精神疾患の分類と診断の手引」⁸⁾ による診断名は「神経発達症群／神経発達障害群」であるが、本セミナーでは、一般的に用いられることが多い「発達障害」という用語を用いることとした。

表1 がんカルタの構成

がん対策領域	ねらい	カルタ枚数
がん全般	全体理解	14枚
たばこ対策	一次予防	8枚
肝炎ウイルス検診	1.5次予防	2.5枚
がん検診	二次予防	13.5枚
がん医療	三次予防	6枚

表2 メッセージの位置づけ：たばこ対策領域の例

位置づけ	カルタの文言の例
実態	喫煙率 なかなか減らず 肺がん増加
対策	待てられない 最優先の たばこ対策
呼びかけ	吸わないで あなたがよくても みんなが困る

※ 領域別に「実態」「対策」「呼びかけ」の札を作成

2) 「発達障害カルタ」の作成ワーク

反転授業の実現を目指し、事前学習の内容を活用するプログラムとした。また、アクティブラーニングの技法として、1) シンク・ペア・シェア、2) ジグソー法、3) ポスターツアーを活用した^{10,11)}。

プログラムの構成は、ジグソー法を活用し、「当初グループ」(65分)と、「ジグソーグループ」(25分)の2部構成とした。

当初グループは、既述のカルタ体験ワークと同じメンバーで構成される6グループとし、以下に示す手順で進行した(表3)。グループテーマの決定後、カルタ作成の準備として、情報共有やカテゴリー分け、カルタで伝えたい内容の検討のワークを約50分間かけて行った後、カルタを制作するためのワークを約15分間で

表3 当初グループの概要

1	グループテーマの決定	「情緒的相互性」「コミュニケーション」「こだわり」「不注意」「多動性」「衝動性」から1テーマを選択 ・連想することをふせんに記入
2	テーマに関する情報共有	・隣あう2人で共有する ・グループ全体で共有する 【技法：シンク・ペア・シェアの活用】
3	情報のカテゴリー分け	・ふせんを模造紙に貼っていく ・似た内容を近くに貼りカテゴリー化 【KJ法の活用】
4	カルタで伝えたいことの検討	・各自で考えてふせんに記入 ・隣あう2人で共有する ・グループ全体で共有する ・カテゴリーとの対応を確認し、貼付け 【技法：シンク・ペア・シェアの活用】
5	カルタ制作	・各グループ1-2枚を目安(約15分) ・伝えたいことから、文言を出し合う ・伝えたいことや文言のイメージにあうイラストについて意見を出し合う ・カルタ札の作成および完成

実施した。

なお、当初グループの6つのグループテーマは、神経発達症群/神経発達障害群(発達障害)について「DSM-5[®]精神疾患の分類と診断の手引」を参考に⁸⁾、自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害から「情緒的相互性」「コミュニケーション」「こだわり」の3テーマを、注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害から「不注意」「多動性」「衝動性」の3テーマを設定した。

グループでの討議を進めやすくする工夫として、運営者側で、当日に使用するための書籍や資料を準備し、各グループに貸与した。その際、該当のページに付箋を貼付けるなど、共通理解が生まれやすくするための工夫を行った。

ここで活用したアクティブラーニングの技法「シンク・ペア・シェア」は、話し合いの技法である¹¹⁾。まず自分自身で考え、次に、話し合いやすさを考慮し2人で共有する。さらに、グループ全体で共有するというように、段階的に話し合いを進めることに焦点を当てた。

次に、ジグソーグループを行った(表4)。アクティブラーニングの技法であるジグソー法を活用し、当初グループから1~2名で構成されるグループに再編成した。その後、ポスターツアーを活用し、完成したカルタやグループでの話し合いの経過をポスターとみなし、相互に学び合う活動を行った。

表4 ジグソーグループの概要

1	グループの再編成	当初グループの各グループから1~2名で構成されるグループに再編成 ・当初グループのテーブルに置かれた付箋や模造紙、カルタをポスターとみなす
2	ポスターツアーの実施	・再構成されたグループで、各グループを順番に見ていく ・ポスターの解説は、当初グループの者が行う ・その後、質疑応答や感想等を話し合う

ここで活用したアクティブラーニングの技法「ジグソー法」は、教え合いの技法である¹¹⁾。当初グループで学習したことを、他のメンバーに発表を通して伝えることで、より発展的な学びを可能にする技法である。また、ジグソー法の活用により、当初グループで担当したテーマだけでなく、全てのテーマについて学習することが可能となることも特徴とされている。

3) 講評とまとめ

最後に、午後の「事例検討会」で、アドバイザー的

な役割を担う講師から講評を受け、まとめとした。

活動評価

1. 事前学習

本プログラムでは、反転授業を採用し、ワークショップでは、発達障害に関する知識伝達型の講義等を行わず、事前学習課題を課した。

本報では、事前学習に費やした時間や内容を聞き取る等の評価アンケートは実施していない。しかし、当日プログラムの「発達障害カルタ」の作成ワークでは、参加者が、主体的に発言し、討議している様子が観察された。

これらの点から、事前学習として、当日プログラムにおける活動のポイントを事前に知らせ、準備を促すことは有用な方法であることが推察された。

2. 当日プログラム

1) 「がんカルタ」の体験と解説

本プログラムでは、グループ構成をくじで決めたため、初対面の人とも含まれていた。そのため、カルタとりワークは、アイスブレイキングとしても機能したものと推察される。アイスブレイキングは、ワークショップでは、チーム意識の醸成を加速させる役割を担うものである⁴⁾。

カルタとりの様子から、カルタとりを楽しむこと、他、とったカルタを見せ合ったり、カルタの裏面の解説を確認したり、近くの人と情報交換をするなど、積極的に取り組んでいる様子が確認された。これらの点から、副次的ではあるが、健康教育の視点からは、成人を対象としたがん対策についての教育機会としても機能していた可能性が窺われる。

2) 「発達障害カルタ」作成ワーク

参加者は主体的にかつ個々の役割をもって活動している様子が観察された。以下に、各グループで作成されたカルタの文言例と（表5）、カルタ例を示す（図1）。

ワークショップの一部という非常に限られた作業時間であったにも関わらず、作成されたカルタの文言は、自閉スペクトラム症に関連する「情緒的相互性」「コミュニケーション」「こだわり」、注意欠如・多動症に関連する「不注意」「多動性」「衝動性」の特徴を捉えるもので、一般の人たちにも理解されやすい内容であることが窺われた。また、イラストを組合せることにより、伝えようとすることをより明確に示している様子

表5 作成された「発達障害カルタ」の文言例

グループ	カルタの文言
情緒的	表情の 声なき言葉 使えない
相互性	楽しいを 分かち合うこと むずかしい
コミュニケーション	質問は わかりやすく 簡潔に 話し下手 タイミングよく 言葉かけ 怒るより 成功体験 ホットする
こだわり	エネルギー うまく使えば 輝く力 好きなこと こだわり続け 達人に 変更は 先に伝えて いい笑顔
不注意	聞いてない！？ わざとじゃないよ ゆるしてね わかったぞ！ 目と耳でわかる やるべきこと
多動性	待てないよ からだが先に 動いちゃう
衝動性	言っちゃった 悪意はないんだ もう遅い

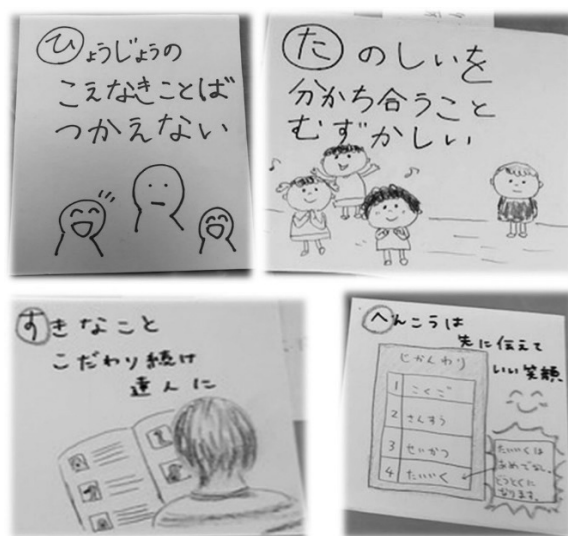


図1 作成された「発達障害カルタ」のカード例

が観察された。

しかし、これらの作成されたカルタは、カルタの文言とイラストだけで、カルタが伝えようとすることをすべて伝えるには限界もある。そこで、札が作成された背景や伝えたいこと、専門的な視点からの解説等についての記述を加えることで、発達障害について理解を深めるための教材として発展させることも可能になると推察される。

プログラムの最後の「講評とまとめ」では、第2部の講師より、「作成されたカルタには、参加者らの普段の臨床や教育に対する姿勢が反映されている」との評価を得た。この視点から、作成されたカルタを確認すると、各々の参加者が日常の臨床や教育の中で感じている『この部分について知ってもらえることができれば、社会としての理解が進むのでは』という着眼点が反映されているものと推察される。

これらの活動評価を通して、主観的ではあるが、本

プログラムの目的であった、発達障害に関する理解を深め、共通理解をもつという点について、一定の成果が得られたものと期待する。

今後の課題

本報では、事前課題を課し、反転授業によるワークショップを計画および実践し、評価を試みた。本プログラムは、参加者にとって、聴くという受動的な学習時間は限られており、多くの時間が、書く・話す・発表するや、体験するという能動的、主体的な活動に充てられていた。また、事前学習課題で得た知識や自身の経験を、ワークショップという対面学習で活用している様子が観察された。これらの点から、本プログラムでは、学びの質として、知識の習得にとどまらず、多角的な学びや、アクティブラーニングが実践されていたものと推察される。さらに、専門職研修で課題とされる、学習経験やキャリアが異なる参加者に対する対応についても、参加者の観察による評価からは、それぞれのレベルに応じた主体的な学びに繋がっていたものと推察される。

一方で、今後の課題も残る。本プログラムの参加者は、研修を主催する医療機関の研修プログラムの受講者や修了者で、普段から研鑽を積むことに対して、非常に熱心な集団であった可能性が高い。本プログラムの効果を的確に評価するためには、今後、異なった集団を対象に、実施および評価していくことが課題である。

本報では、当日プログラムの導入として、カルタ教材への理解を深めることを目的に「がんカルタ」を活用した体験ワークを行った。この点は、著者らが教育カルタの開発経験を有していたため可能となった経緯がある。今後、カルタ作成ワークショップを普及させていくためには、様々な場面で活用できる方法が必要となる。例えば、事前学習として、教育カルタ事例に関する資料を提示する方法や、参加者が自身で興味をもったカルタ札に関する資料を持ち寄り共有するなどの方法が考えられる。この点についても、今後、検討が必要な課題である。

最後に、本報における評価は、参加者の観察、作成された作品、専門家による講評によるもので、プロセス評価である。今後、教育効果の評価なども含めた、客観的な視点からの評価を行っていくことも課題である。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

謝辞

本研修の主催者であるなにわ生野病院心療内科の皆様、本研修を運営された関係者の皆様、参加された皆様に感謝申し上げます。

本プログラムは、臨床心理士資格認定協会の「臨床心理士」資格取得者の研修機会として承認された研修の一部として実施された（2017年11月、認証番号：W30087）。

本報の一部を、第27回日本健康教育学会学術大会（2018年7月、兵庫県姫路市）にて報告した。

文献

- 1) 溝上慎一. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東京：東信堂；2014. 4.
- 2) 溝上慎一. 前掲書1)：10.
- 3) 溝上慎一. 前掲書1)：140.
- 4) 日本医学教育学会監修. 日本医学教育学会FD小委員会編. 医療プロフェッショナルワークショップガイド. 東京：篠原出版新社；2008. 6-23.
- 5) 佐々木良造, 長谷川貴之. 数学語彙の定着を図るための教材「数学カルタ」作成経過報告. 日本語教育方法研究会誌. 2020；26（2）：122-123.
- 6) 青木幸子, 崇田友江. 女子中学生のジェンダー観の涵養と教育カルタの効果. 日本家庭科教育学会誌. 2012；54（4）：258-266.
- 7) 松崎史周. 保育におけるオノマトペの教材化：オノマトペかるたを作成して. 日本女子体育大学紀要. 2020；50：29-35.
- 8) American Psychiatric Association. 日本精神神経学会日本語版用語監修. 高橋三郎, 大野裕監訳. 染矢俊幸, 神庭重信, 尾崎紀夫, 他訳. DSM-5[®] 精神神経疾患の分類と診断の手引. 東京：医学書院；2014. 26-29, 30-34.
- 9) 鈴木 朋子, 井岡 亜希子, 津熊 秀明. がん対策推進のための健康教育の試み：教育ツール「がんカルタ」の開発. 大阪樟蔭女子大学研究紀要. 2014；4：229-232.
- 10) 栗田佳代子, 日本教育研究イノベーションセンター編著. インタラクティブ・ティーチング：アクティブ・ラーニングを促す授業づくり. 東京：河合出版；2017. 27-40.
- 11) Barkley EF, Cross KP, Major CH. 安永悟監訳.

協同学習の技法：大学教育の手引き，京都：ナカ
ニシヤ出版；2009. 85-88, 128-133.